

セスであり、学習活動そのものに価値を認めることができる。一人一人にとっては、活動することが学習の方法であると同時に学習内容そのものである。体験的な学習活動のよさは、次のようになる。

- 知識を教え込む教師主導の授業から、意欲的に取り組む児童生徒中心の学習への転換が図られる。
- 体験的な学習活動を通して、自分自身のよさや可能性を発揮して、知識を自分なりに獲得していくことができるようになる。
- 様々な体験的な学習活動を通して、地域社会や生活に根ざした社会科の学習を展開でき、人間の生活の知恵や生き方を学ぶことができるようになる。
- 学習が楽しいものとなり、成就感や分かる喜びを味わい、進んで社会的事象とかわることができるようになる。

体験的な学習活動を学習過程に組み入れるに当たっては、学習過程の段階とその目的を明確に押さえる必要がある。学習問題を設定する段階では、様々な疑問や感想を出し合ったり、不十分さや問題点などに気付いたりしながら自分の問題を見だし、その後の学習に対する関心・意欲を高めることができる。学習問題を調べ解決していく段階では、新たな社会的事象に接し、事実認識を深めたり、自分の思いや気持ちを発揮したり、さらに、様々な人間の願いや生き方を学んだりしながら、自分の疑問や予想が確かめられ、学習問題の解決を図っていくことができる。学習のまとめの段階では、学習のねらいとしているものを自分なりに最終的に獲得し、定着を図ることができる。

2 研究主題にかかわる意識・実態調査

(1) 調査実施の趣旨及び方法

本研究の主題に迫るために本県の中学校の社会科担当教員及び生徒を対象に、社会科学習に関する両者の意識のずれ等の実態を把握し、社会科学習指導の諸問題を明らかにするとともに、授業の改善の方向を探る。

- 実施期日 ・平成5年1月8日～16日
- 対象 ・県内の中学校社会科担当教員 60人
・県内の中学校生徒 1,030人
- 方法 ・質問紙法によるアンケート

(2) 調査内容

- ・学習意欲に関すること
- ・評価に関すること
- ・社会観・人生観について
- ・生徒が生き生きする社会科授業について

(3) 集計結果と分析（複数回答、数字は回答数の割合、一部抜粋）

調査のねらいは、主に教員と生徒との意識のずれから指導上の問題点を探るものである。各質問に対する回答からは、そのずれをみることができる。特に、質問1の学習意欲に関する事項については、「学習に意欲的に取り組んでいない。」と考えている教員がわずかに3.3%であるのに対し、生徒の20.8%が、「学習が楽しくない。」と答えている。

質問1 社会科の学習に、生徒は意欲的に取り組んでいますか。		質問1 あなたは、社会科の授業が楽しいですか。	
ア 意欲的に取り組んでいる。	10.0	18.5	ア 楽しい。
イ 単元や分野によって差があり、どちらともいえない。	85.0	59.5	イ 分野によって差があり、どちらともいえない。
ウ 意欲的に取り組んでいない。	3.3	20.8	ウ 楽しくない。
エ その他	1.7	1.2	エ その他

質問2の学習意欲をなくす原因については、両者とも同様の回答であるが、生徒の「学習のやり方が分からないから」の割合が高くなっている。質問3の学習意欲を喚起するための方法に関しては、教師の「生徒が自主的に調べたり、まとめたりする時間を十分にとる。」が非常に高い割合を示しているのに対し、生徒は、質問2と同じように「学習のやり方を教えてくれる授業」「学習のポイントを教えてくれる授業」を望んでいる。

質問2 学習意欲をなくす原因は何だと思いますか。		質問2 質問1でウと答えた人は、なぜ楽しくないのですか。	
ア 学習内容が多すぎるから	48.3	42.1	ア 暗記することが多すぎるから
イ 生徒にとって理解しにくい語句や用語が多いから	16.7	14.5	イ 難しい用語や語句が多いから
ウ 授業形態が講義式であり、知識注入型になっているため	25.0	15.9	ウ 先生の話や説明中心の授業が多いから
エ 生徒が学習の仕方を分からないから	8.3	18.2	エ 学習のやり方が分からないから
オ その他	1.7	9.3	オ その他

質問3 学習意欲を喚起するために、どのようなことをすれば効果があると考えますか。		質問3 どのような社会科の授業を望みますか。	
ア 予習や発表、発言などの努力や良い点を評価し、学習の中に生かす。	25.0	12.8	ア 予習や発表などのよい点を認め励まし、評価してくれる授業
イ 導入を大切に扱い、生徒に学習の見通しをもたせる。	40.0	19.5	イ 前の授業で何を学習したのかや次の授業で何を学習するのかが分かる授業
ウ 学習内容だけでなく、学習の仕方も身に付けさせる。	21.7	40.8	ウ 内容だけでなく、学習のやり方も教えてくれる授業
エ 机間指導などにより、生徒一人一人の疑問に答える時間を十分にとる。	3.3	26.9	エ まよったときや疑問が生じたときにいてねいに教えてくれる授業
オ 学習内容を精選し、一人一人の実態に配慮しながら学習をすすめる。	43.3	52.9	オ もうすこしゆっくり進んでくれて、学習のポイントを教えてくれる授業
カ 生徒が自主的に調べたりまとめたりする時間を十分にとる。	60.0	27.0	カ 考えたりまとめたりする時間を十分に与えてくれる授業
キ その他	3.3	3.6	キ その他

また、質問4「学習で主に力を入れていること」は、「発表や話し合い活動」と答える生徒が24.0%いるのに対して、評価は主に「発言分析による」と答えた教員はわずか5.5%である。

質問4 社会科学習の評価は、主に何によって行っていますか。		質問4 社会科学習をする上で、主に力を入れていることは何ですか。	
ア ペーパーテスト(事前・事後調査,定期考査,小テストなど)	100.0	51.2	ア ペーパーテスト
イ 作品分析(ノート,ワークシート,新聞,レポートなど)	66.7	43.2	イ ノートや白地図などの作業学習,新聞・レポート作り
ウ 発言分析(座席表,授業記録,VTR,チェックリストなどを利用して)	5.0	24.0	ウ 個人やグループの発表や話し合い活動
エ 行動観察(座席表,観察カード,チェックリストなどを利用して)	23.3	28.0	エ 子習をして資料をすばやく見つけたり,疑問なことを復習したりすること
オ 自己評価,相互評価	0.0	14.6	オ 自分やグループで決めた目標や学習したことをふりかえり,次の学習に生かすこと
カ その他	0.0	3.9	カ その他

これらのことから、学習意欲が高まるような学習課題を設定した授業の工夫や学習の中で児童生徒の存在感・成就感・満足感を感じさせる授業の工夫が一層期待されるものと考えられる。

(4) 意識・実態調査のまとめ

意識・実態調査の分析を踏まえ、教師と生徒のずれを少しでもなくしていくためには、新しい学力観に基づいた授業の改善を図っていく必要がある。児童生徒が主体的に生き、自ら進んで考え、判断し、自信をもって表現したり行動したりできるような授業を目指していくことである。

そのためには、次のような条件に配慮して学習を展開していくことが大切であると考えられる。

- 一人一人の個性が尊重され、見方、考え方が認められること
- お互いを認め合い、みがき合う学習が成立すること
- 具体的な人間の営みを軸とした教材を開発し、授業を展開すること

自ら進んで学ぼうとする社会科学習にするためには、小学校、中学校及び高等学校の系統性を理解し、発達段階に応じて、児童生徒が社会的事象を自分とのかかわりでとらえられるように手だてをとることが重要である。アンケートの結果を踏まえ、主題に迫るためには次のような手だてが考えられる。

小学校では、自己の興味関心に基づいた体験的な学習活動を工夫し、学習が身近に感じられるようにして、自分とのかかわりで社会的事象をとらえることができるようにする。

中学校では、擬似体験的な活動や調査活動、グループによる話し合い活動を通して、学習している社会的事象が自分にとって役に立つものであるということを実感し、学び合うことの大切さを感じることができるようになる。

高等学校では、一方的に講義を聞くことが多くなりがちな授業から脱却し、抽象的な授業から、具体物を提示して感動を喚起したり、自分の考えを表現したり、話し合ったりする活動を通して、自分の考えを表出し、自分と社会的事象とのかかわりを身近に感じることができるようになる。

小学校、中学校及び高等学校が一貫して授業実践することは、児童生徒の発達段階に応じた社会科学習の在り方を教師自身がお互いに学び合うことができるよい機会であり、児童生徒が社会的事象を自分とのかかわりでとらえ、自らの生き方に迫るといった社会科のねらいを達成するために有効ではないかと考える。